

## アグレッションの肯定・否定的側面及び 方向性を測定する尺度作成の試み

—大学生の場合—

児童養護施設 愛の聖母園 名城 卓 哉

### 和文要旨

本研究では、ネガティブなイメージで用いられ、他者に向かうものとして扱われることの多い“攻撃性”という概念を、そのポジティブな側面や人間の内側に向けられることに着目し、能動性と破壊性、外側に向かうエネルギーと内側に向かうエネルギーの4象限に攻撃性を分類し、攻撃性を広義の意味での“アグレッション”と定義づけた。

尺度作成のため、大学生を対象とした質問紙調査前には、大学院教員らと共に内容的妥当性を検証した。本調査では、アグレッション尺度の併存的妥当性、収束的妥当性、弁別的妥当性の検討をするための尺度と組み合わせて質問紙を配布した。そのデータを基に因子分析を行った結果、「積極性」、「内省力」、「他責感」、「自責感」の4因子が抽出された。 $\alpha$ 係数は高い値を示し、内的整合性は十分な信頼性を備えていることが確認された。

併存的妥当性に関しては、理論的に近似とみなされる下位尺度間では、高い相関係数が算出されたが、「内省力」因子においては、関連がみられなかった。収束的妥当性に関しては、理論的に近似とみなされる下位尺度間で、比較的高い相関係数が確認された。弁別的妥当性に関しては、全体としては低い相関係数が算出されたものの、「他責感」因子と高い相関が示された。

以上のことより、本研究でのアグレッション尺度の信頼性や妥当性に関して、十分な結果を示すことができなかった。今後の課題として、経時的安定性の検証や、併存性や弁別力を高められるよう、別尺度との比較検討、もしくは質問紙法以外での妥当性の確認が求められる。

キーワード：アグレッション 尺度作成 信頼性 妥当性

### 問題と目的

攻撃性という言葉を目にすると、悪しきもの、表には出していけないもの、人を傷つけるものとイメージすることができる。

古典的な攻撃性に関わる理論のひとつに、Freud, Sの欲動論があげられる。Freud, Sは、生きる欲求が究極的には、死へ向かうといった死の欲動を最も原初的とする欲動論を提唱した。Freud, Sは、Breuer, J.が雄の動物の性本能や若い男性の性的欲求を攻撃性と捉えていることに賛同していて、活動性 (activity)、力強さ (masculinity)、性的攻撃性などを男性の攻撃性と関連づけている。また、治療過程においてみられる治療者への敵意は、転移の現れであることを

明らかにした(Mizen & Morris, 2007)。生と死や、愛と憎しみといった2元論を展開していった。

人間は、誕生直後から自我の発達が始まると、クラインは仮説を立てている(占部, 1985)。攻撃欲動の一部は、母親の乳房に投影されることで、外部に放出される。残りの攻撃欲動はリビドーにより統制されるが、完全には攻撃欲動の整理がつかずに、破壊衝動の恐怖は内部に残る。一方で、リビドーも快感情を与えてくれるよい乳房(対象)に投影され、良い対象と悪い対象が同時に存在することになる。良い対象が悪い対象によって破壊される恐怖を抱くようになる。

さらに、Storr, A. (1968)は、Freud, S.における攻撃性は、破壊的な側面にのみ焦点があたっ

ていると批判し、自己実現や自己主張のエネルギーとして肯定的に攻撃性を捉えている。攻撃性は破壊的である必要はなく、全ての有機体の特性であるように、攻撃性は生命を維持し成長するための本質的な傾向から生じる。発達する上で、生命のもつ力が妨害された時のみ、怒りや激情、憎しみなどが攻撃性と結びつくと言っている。

また、「攻撃性という言葉は、相手に傷を与える行動そのものを示す場合や、意図や感情や期待、あるいは欲動といった行動の推進力を示している場合もある」と、岡田（2001）は論じている。攻撃性とは、他者の心身に害を与える行動や、その行動を誘発させる欲動やエネルギー、または情動などを表す概念と言える。そして、有害な刺激の中には、直接的に相手を傷つけることが目的である行動と、間接的に傷つけてしまうことになる行動がある。

遺伝と環境の問題は、攻撃性という概念に限定されず、人間の発達を論じる上では欠かすことのできず、幾度となく議論されてきた。攻撃性に関するいくつかの研究では（Rushton *et al.*, 1986, Tellegen *et al.*, 1988）、攻撃に対する遺伝的影響は約50%程度であることを示しており、遺伝と環境の要因はおおよそ同程度であると考えられる。心理学の中でも、特に社会心理学領域においては、いわゆる狭義の意味での攻撃性、つまり否定的・破壊的な攻撃性についての知見が多くみられ、一般的にもこの意味で捉えられることが多い。大淵（1993）によれば、攻撃性とは、「他者に危害を加えようとする意図的行動」と定義されている。ここには攻撃性が、行動であること、意図的であること、敵意や憎しみといったネガティブな感情が背後にあること、他者に向けられること、といった内容を含んでいることが想定されている（安立, 2001）。

社会心理学のみならず、臨床心理学において、攻撃性をどう捉え、それを治療的にどのように活かしていくかを検討することは、心理的治療をより有益なものにするために、必要になると思われる。そこで、本研究では、臨床心理学のパースペ

クティブから攻撃性という概念の定義づけとモデル化を行う。まず、上の定義に基づいた攻撃性の捉え方を整理し、本研究での視点を明らかにする。

人格発達のプロセスにおいて、自我の弱まる思春期には、第2次性徴の出現に伴う内的衝動と、社会的要請という外的圧力の双方の影響を受けて相対的に自我が弱まり、自己嫌悪など自我収縮的傾向と、自己主張など自我拡張的傾向との間で揺れ動く（北村, 1987）。この時期の攻撃性は、意図して行なわれる、相手を傷つけるための行動というよりも、個人が心身ともに成長する過程における内的葛藤の現れであると捉えていくことは、心理臨床において重要な視点である。

攻撃性により積極的・肯定的意味を与えた Storr, A. (1968) は攻撃性を「知的な仕事を成し遂げる基礎であり、独立を達成する基礎であり、また、人間がその仲間の中にあつて、己を持するために必要な正しい自尊心の基礎である」と定義し、環境を支配し生きていくために必要な衝動と捉えた。Storr, A (1991) は、攻撃性は自己保持 (self-preservation)、自己主張 (self-assertion)、自己肯定 (self-affirmation) と同義であり、他者との違いを示すためには攻撃性が必要であるとしている。

破壊的な攻撃行動は二次的なものであるといえるし、自分を守りその権利を主張するための攻撃性は、相手を傷つけることになる場合もあるが、元来加害的行動とは異なるものといえる。

攻撃することや、攻撃されること、といった言葉の裏には、常に他者が存在するかのようには思われる。しかし、攻撃が他者に向かわずに自己に向けられることもある。心理的な葛藤場面に出くわした時に、他者に攻撃が向かわず、自らの不甲斐なさや未熟さ、至らなさといった自己否定感と共に、自己に攻撃が向けられる場合がある。

このように、攻撃性には、破壊性や衝動性といった否定的側面と、機能的・建設的に働く能動的側面がある。また、他者のみならず、自己にも向けられることもあり、方向性をもつものということができる。つまり、攻撃性には2つの側面と2つ

の方向性があるといえる。

人格は、意識と無意識、男性性と女性性、大人らしさと子どもらしさ、父性と母性、陰気と陽気などを含み、どちらか1つのみを1人の人間が持ち合わせているわけではなく、これらがまとまりを帯びて、複合的に存在している。ユング(1970)によれば、例えば、意識であるなら対極の無意識の活力に人の心は補完され、支えられていると主張している。また、人間の基本的な態度である外向型と内向型は、完全に2つに分けることができるものではなく、人間の中にはこの2つの態度が同時に存在しているが、ただ相対的にどちらがどの程度の割合を占めるかが、人によって違うとしている。このことは、本研究での論点に従えば、人格のみならず、攻撃性にも共通する特性であると考えられる。先行研究では、攻撃は他者に向けられ、そのネガティブな様相に着目した研究は多いが、自己にも方向づけられることや、ポジティブに機能することを踏まえて、攻撃性という概念を捉える試みは少ないといえる。

本研究では、攻撃性という言葉自体にネガティブな意味合いが含まれることが考えられるため、攻撃性ではなくアグレッションという言葉を用いることとする。そして、攻撃性の諸相を扱った数少ない研究の代表である安立(2001)のモデルを参考に、本研究でのアグレッションを以下のように定義する。

「アグレッションとは、能動的な力である肯定的側面と、破壊的な力である否定的側面の2面性を持つ。そして、両側面には方向性があり、前者は適応行動を発動させ、自己の外に向かうエネルギーと自己の内に向かうエネルギーとにわけられ、後者は暴力的行動を発動させ、他者あるいは自己に方向づけられる。能動的な力と破壊的な力には、多様な形態があり、両者を包括した力には、生きるための原動力が存在する。」

上述した定義に基づき、本研究ではアグレッションについて、2面性(肯定的側面と否定的側面)と2つの方向性(他者と自己)を有する、2次元4象限の概念であるというモデルを提唱する。次項に、各象限を図式化したものと、名称を示す。

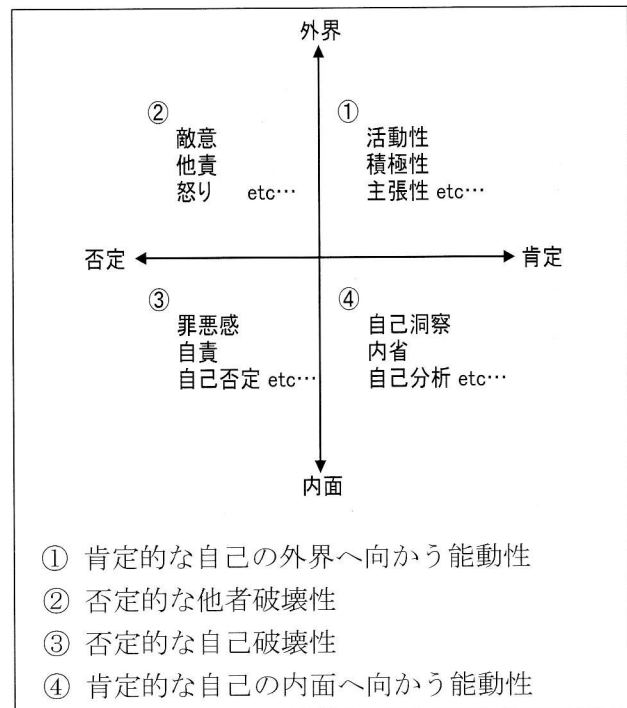


Figure1 アグレッションの2次元4象限モデル

以上、攻撃性に関する先行研究を概括し、その問題点を指摘した上で、本研究での新たな定義づけとモデル化を試みた。これまでの研究では、このように臨床心理学的に攻撃性を捉え、実証研究へ繋げた試みは少ないといえる。

本研究での定義に基づき、アグレッションが能動性と破壊性の二側面を持ち、それぞれ二つの方向性があると仮定した上で、これまでの研究の限界点を踏まえ、新たな尺度を作成することを研究目的とする。

質問紙の作成により、心理面接などの場面でこの質問紙を用いることで、クライアントがどのようなアグレッションの諸相を有しているかを把握することができる。そして、クライアントに対する理解を深め、より良い援助を提供できる、という意義があると考えられる。

## 方法

1) 下位概念設定の妥当性検討と項目の内容的妥当性の検討 上記で設定した4下位概念の妥当性について、臨床発達心理学を専門とする大学院教員1名および、心理臨床学を専攻する筆者により、下位概念を導いた理論と整合しているか検討が行

われた。その結果、下位概念設定が妥当であると判断された。

次に、上で設定した下位概念について、筆者を含めた大学院生ら（男性2名、女性3名）と共に、自由発想やブレインストーミングを行い、下位概念毎に25項目、計100項目を作成した。

その際、「肯定的な自己の外界へ向かう能動性」と「肯定的な自己の内面へ向かう能動性」に関しては、安立（2001）、Storr, A. (1991)、八木（1987）を、「否定的な他者破壊性」に関しては、安藤・曾我・山崎・鳥井・嶋田・宇津木・大芦・坂井（1999）、秦（1990）を、「否定的な自己破壊性」に関しては、Mizen, R. & Morris, M. (2007) を参考にして、本研究でのアグレッションの定義に加え、各下位概念に対して、以下のような定義と例文を示し、自由発想、ブレインストーミングを行った。

大学院生ら5名により考案された項目と、筆者が同定義に基づいて独自に考えついた項目を後日合わせ、各25項目、計100項目まで絞り込み、質問内容が精選された。予備調査を実施後、天井・フロア効果のみられる22項目を削除した。残りの78項目に関しては、臨床発達心理学を専門とする大学院教員1名と、心理臨床学を専攻する筆者により、本研究でのアグレッションの定義および各下位概念の定義との整合性という観点から検討され、不適切な項目に関しては内容を修正・削除し、最終的に合計50項目まで絞り込み、内容的妥当性が確認された。

## 2) 測定尺度

以下の5つの尺度を実施した。

**アグレッション尺度（暫定版）** 上記の手続きに従い、「肯定的な自己の外界へ向かう能動性」の下位概念12項目、「肯定的な自己の内面へ向かう能動性」の下位概念14項目、「否定的な他者破壊性」の下位概念12項目、「否定的な自己破壊性」の下位概念12項目、計50項目により構成された。「非常に当てはまる」、「やや当てはまる」、「どちらともいえない」、「あまり当てはまらない」、「全

くあてはまらない」の5段階（1～5点）で評定を求めた。

**安立（2005）の攻撃性質問紙** 攻撃性の能動性を捉えた安立（2001）の攻撃性質問紙（以下、攻撃性質問紙）を、新たに作成した尺度の基準関連妥当性の中でも併存的妥当性の確認のために用いる。攻撃性質問紙は、本研究での「肯定的な自己の内面へ向かう能動性」以外の下位尺度、「肯定的な自己の外界へ向かう能動性」、「否定的な他者破壊性」、「否定的な自己破壊性」と理論的に近似の下位概念である、「積極的行動（9項目）」、「対象攻撃行動（8項目）」、「猜疑心（4項目）」、「自責感（7項目）」、「自己破壊行動（5項目）」で構成されている。これら攻撃性質問紙の全ての項目、合計33項目を併存的妥当性検討のために用いる。安立において、 $\alpha$ 係数はそれぞれ「積極的行動」で.80、「対象攻撃行動」で.75、「猜疑心」で.71、「自責感」で.76、「自己破壊行動」で.68であり、高い内的整合性が確認されているが、妥当性に関する記述はみられない。「大変よくあてはまる」、「かなりあてはまる」、「少しあてはまる」、「あまりあてはまらない」、「殆どあてはまらない」、「全然あてはまらない」の6段階（1～6点）で評定をされた。

### 肯定－外

「活動性、積極性といった自己の外に向けられる能動的な感情」

- ・色々な世間の活動がしてみたい
- ・自分のやりたいことに向かって突き進んでいきたい

### 肯定－内

「向上心、内省力といった自己の内に向けられる能動的な感情」

- ・注意や忠告をされたことは、積極的に直していきたい
- ・嫌な出来事が起こった時に、自分の何がいけなかったのかを考える

### 否定－外

「他責感や復讐心といった他者に向けられる破壊的で衝動的な感情」

- ・うまくいかない、すぐ人にあたりたくなる
- ・他者を責め立てる

### 否定－内

「自己否定感や罪悪感といった自己に向けられる否定的な感情」

- ・他者が不快そうにしていると、自分が悪かったのではないかと  
思う
- ・自分はだめな人間だと思う

Figure2 各下位概念の定義と例文



**日本版Buss-Perry攻撃性質問紙** 日本版Buss-Perry攻撃性質問紙（以下、日本版BAQ）は、アグレッションの否定的側面を測定する尺度であるので、理論的に「否定的他者破壊性」とは近似であることが予測されるが、新たに作成した尺度の構成概念妥当性の中でも弁別的妥当性の確認のために用いる。安藤ら（1999）において、下位尺度の $\alpha$ 係数は.70～.78、全体尺度の $\alpha$ 係数は.81であり、高い信頼性と、ノミネート法、文章完成法的手法、P-Fスタディを用いて、高い妥当性が確認されている。日本版BAQの4つの下位尺度の構成概念を以下に示す。「短気（5項目）」は、怒りの喚起のされやすさを測る尺度で、怒りっぽさ、怒りの抑制の低さなどを測定する項目からなる。「敵意（7項目）」は、他者に対する否定的な信念・態度を測る尺度で、他者からの悪意や軽視など猜疑心や不信感を測定する項目からなる。「身体的攻撃（7項目）」は、身体的な攻撃反応を測る尺度で、暴力反応傾向、暴力への衝動、暴力の正当化などを測定する項目からなる。「言語的攻撃（5項目）」は、言語的な攻撃反応を測る尺度で、自己主張、議論好きなどを測定する項目からなり、合計24項目から構成されている。これら全ての項目を、弁別的妥当性検討のために用いる。「非常によくあてはまる」、「だいたいあてはまる」、「どちらともいえない」、「あまりあてはまらない」、「まったくあてはまらない」の5段階（1～5点）で評定された。

**自己肯定意識尺度** Storr, A（1991）が述べているように、アグレッションが自己肯定と強く関係するとすれば、新たに作成した尺度の「肯定的な自己の外界へ向かう能動性」と自己肯定は関連することが考えられる。自己肯定意識尺度は、対自己領域と対他者領域の2つに分けられ、それぞれが3つの下位成分から構成されている（平石, 1996b）。対自己領域の下位成分は、「自己受容」、「自己実現的態度」、「充実感」、対他者領域の下位成分は「自己閉鎖性・人間不信」、「自己表明・対人的積極性」、「被評価意識・対人緊張」から成っ

ている。自己肯定意識尺度の中でも、特に「自己実現的態度（7項目）」と「自己表明・対人的積極性（7項目）」と本研究でのアグレッションの「肯定的な自己の外界へ向かう能動性」の関連が予想されるため、この2つの下位成分、合計14項目を構成概念妥当性の中でも収束的妥当性の確認のために用いる。「あてはまる」、「どちらかといえばあてはまる」、「どちらともいえない」、「どちらかといえばあてはまらない」、「あてはまらない」の5段階（1～5点）で評定された。なお、項目選択に関しては、心理臨床学を専攻する筆者と大学院生ら（男性1名、女性2名）によって、本尺度の下位概念を導いた理論と整合しているか検討が行われ、収束的妥当性を確認するための尺度として妥当であると判断された。

**自意識尺度** 本研究での定義に従えば、「肯定的な自己の内面へ向かう能動性」は、「自分自身にどの程度注意を向けやすいかの個人差（自意識特性）」（菅原, 1984）と関連があることが予想される。菅原によると、自意識は私的自意識と公的自意識との二つに大別され、私的自意識とは、自分の内面・気分など、外からは見えない自己の側面に注意を向ける程度の個人差を示し、公的自意識とは、自分の外見や他者に対する行動など、外から見える自己の側面に注意を向ける程度の個人差を示すものであるとされる。自意識の中でも、特に私的自意識と本研究でのアグレッションの「肯定的な自己の内面へ向かう能動性」との関連が考えられるため、菅原によって作成された自意識尺度の下位成分である「私的自意識（10項目）」を構成概念妥当性の中でも収束的妥当性の確認のために用いる。「全くあてはまらない」、「あてはまらない」、「ややあてはまる」、「どちらともいえない」、「ややあてはまる」、「あてはまる」、「非常にあてはまる」の7段階（1～7点）で評定された。なお、項目選択に関しては、この尺度においても、心理臨床学を専攻する筆者と大学院生ら（男性1名、女性2名）によって、本尺度の下位概念を導いた理論と整合しているか検討が行われ、収束的

妥当性を確認するための尺度として妥当であると判断された。

### 3) 研究協力者

**調査1** 予備調査：鹿児島県内の私立大学に通う大学生45名（男性11名，女性34名，19～23歳，平均年齢20.31歳）。

**本調査**：鹿児島県内の国公立大学に通う大学生578名（男性275名，女性303名，18～28歳，平均年齢19.79歳）。

**調査2** 本調査：上記の鹿児島県内の国公立大学に通う同一の大学生のうち369名（男性164名，女性205名，18～28歳，平均年齢19.68歳）。

### 4) データ収集方法

質問紙による調査を行った。質問紙法では，個人の内面を幅広くとらえることができ，結果の一般化を行いやすいという利点がある。研究協力者は，自己のアグレッションの傾向に関して，より多面的・客観的に捉えることが可能と思われる青年期後期の大学生とする。児童期や青年期前期では，劣等感や第2次性徴など，アグレッション以外の変数の影響を強く受け，回答が歪曲されることが考えられる。また，青年期においては，攻撃性が「個々の青年の心の中に沈殿していく可能性をもつ（鳥井・山崎，2002）」という指摘にもあるように，本研究でのアグレッションが，身体的・言語的攻撃行動のような表立った形で表出されることが沈静化することが想定されることから，青年期後期の大学生に研究協力を依頼することが妥当と判断された。

### 5) 調査手続き

本研究での新たな尺度に加えて，上記の4つの尺度を合わせて質問紙を構成し，鹿児島県内国公立大学の教員に問い合わせ，研究協力の承諾を得た上で調査を行った。質問紙調査は，大学生に講義時間を利用し，集団法自記式で施行した。6つの講義において質問紙の配布をした。そのうち，4つの講義では筆者が配布，回収を行い，残り2つの講義では，大学教員により配布，回収が行われた。

調査時期は，予備調査が2009年10月，本調査が2009年12月～2010年1月であった。

## 結果

### 1) アグレッションの因子構造の検討

578名のデータを分析対象とし，まず，天井効果やフロア効果がみられないか確認し，効果のみられた3項目を削除した。そして，アグレッション47項目について，主因子法による探索的因子分析を行った。筆者の仮説から4因子と設定し，各因子間に相関がないことを推定して，バリマックス回転を加えた。初期解における累積寄与率は，40.19%であった。初回の因子分析結果をTable1に示す。

Table1 アグレッション尺度（暫定版）のバリマックス回転後の因子分析結果（N=578）

	F1	F2	F3	F4
27.1) よく考える前に，自分のせいだと思う	.71	.08	.04	-.09
49. 何か嫌な出来事があると，猛烈に自分を否定したくなる	.70	.05	.19	-.02
43. 他者とのトラブルが起こった際には，「自分のせいだ」と思う	.66	.16	-.03	.01
19. 自分が関わることで，物事が悪い方向へ進むと思う	.64	-.04	.28	-.14
14. 「自分さえないければ」と思う	.63	-.03	.26	-.14
37. 自分のことを「許せない」と思う	.60	.18	.22	-.01
8. すぐに謝りたくなる	.59	-.02	-.16	.06
35. 何かにつけ落ち込む	.58	-.05	.18	.05
39. 自分によい思いをさせる	.57	.02	.29	.15
22. 自分の意見に自信がなくて，他者に調子を合わせる	.54	-.23	-.02	-.02
3. 他者が悪いのではなく，自分が悪いと思う	.54	.25	-.11	-.02
10. 自分の努力は報われないと思う	.38	-.25	.24	-.12
11. 厳しいことを言われても，自分と向き合いたい	.02	.66	-.08	.12
44. 失敗は，次に生かそうと常に思う	.03	.54	-.01	.27
30. 注意されたことは，積極的に直していきたい	.09	.54	-.21	.14
28. 傷ついても，前に進みたい	-.01	.54	-.10	.26
42. すべての出来事は，自分を成長させてくれると信じている	.04	.53	-.10	.28
40. 困難と思える道でも，突き進んでいきたい	.01	.53	-.04	.38
18. 人を非難するよりも，まず自分の改善点をみつめていきたい	.23	.53	-.19	.05
15. 注意・忠告・指摘されることをありがたいと思う	.04	.53	-.26	.04
24. 自分の失敗に対しては，何がきっかけだったのかを考えたい	.18	.50	-.07	.19
45. みんなが違えばいい，自分の意見を言いたい	-.25	.44	.18	.16
48. 自分の気持ちは常に，自分の目標に向いている	-.15	.39	.00	.36
9. 人からの評価を自分の糧（かて）にして，今後に生かしたい	.09	.36	-.07	.23
17. 他者の意見に左右されず，正しいと思うことは貫き通したい	-.12	.35	.12	.17
47. 客観的に自分のことを考える	-.06	.31	.07	.12
2. 自分には厳しい	.08	.29	.12	.26
46. 他者に対しての怒りは，なかなかおさまらない	.00	-.07	.68	.11
29. 他者に対して，「いなくなればいいのに」と思う	.10	.01	.68	-.23
32. 腹の立つ相手は，「不幸になればいい」と思う	.05	-.08	.64	-.11
16. 他者の言動に対して，ちょっとしたことで，腹が立ってしまう	.14	-.10	.60	.10
12. 他者のミスは，なかなか許せない	.05	-.04	.58	.17
20. 気に入らない人には，冷たくしたい	.02	-.13	.56	-.11
36. 他者に対して，「同じ目に会えばいいのに」と思う	.18	-.12	.54	-.05
41. 腹の立つことをされると，気がすむまで言い返したい	-.08	.07	.53	.14
5. 他者に対して，「二度と関わりたいくない」と思う	.14	.08	.47	-.13
7. 一度誰かを嫌いになると，ずっとその人が嫌いである	.06	-.05	.45	-.02
23. 心の中で，他者を非難する	.14	-.05	.39	.02
21. 色々なことに，積極的に挑戦したい	.00	.27	-.06	.70
26. 色々な活動に対して，常にわくわくしている	-.03	.19	-.10	.57
4. 何事にも熱意がある	-.08	.30	-.06	.49
31. 興味・関心の幅は広い	-.13	.22	-.07	.48
28. 平凡な毎日よりも，常に何か刺激が欲しい	.00	.15	.08	.48
34. 何事も，できないことは，悔しくてたまらない	.06	.23	.11	.46
13. 一度決めたことは，最後までやり通したい	-.04	.40	.04	.46
33. 世間で今，何が起きているのか気になる	-.03	.12	-.06	.33
1. 欲しいものは手に入れないと気がすまない	.03	.08	.22	.27

注 1) 項目番号は，50項目作成時のものである。

第1因子は、自己に対する否定的感情や諦めの感情を示す12項目から成っていた。第2因子は、起こった出来事に対して自己へのふり返りを積極的に行おうとする項目や、自己主張に関する項目、積極的に目標を達成しようとする項目などの15項目から成り立っていた。第3因子は、他者を非難する気持ちや敵視してさからう感情を示す11項目が負荷した。第4因子は、世間に対する興味や好奇心などの活動性を示す9項目から成り立っていた。

因子分析前に想定された4因子と比べると、第1因子には、“罪悪感”や“自責的感情”、“自己否定”の項目がまとまっていた。第2因子には、“自己洞察”、“自己分析”、“内省する力”などに加えて、「肯定的な自己の外界へ向かう能動性」として集約されることが予測されていた“主張性”や“積極性”に関わる項目が集まった。第3因子には、“敵意”や“他責”、“怒り”に関する項目がまとまった。第4因子には、“活動性”、“積極性”、“主張性”に関する項目が集約されていた。次に、当該因子への共通性が.16未満の項目である、項目1「欲しいものは手に入れないと気がすまない」、項目33「世間で今、何が起きているのか気になる」、項目47「客観的に自分のことを考える」を削除した。続いて、付加量が.35未満の項目、項目17「他者の意見に左右されず、正しいと思うことは貫き通したい」、項目2「自分には厳しい」を除外した。

そして、「否定的な自己破壊性」としてまとまっている項目群の中で、項目49「何か嫌な出来事があると、猛烈に自分を否定したくなる」、項目43「他者とのトラブルが起こった際には、「自分のせいだ」と思う」、項目3「他者が悪いのではなく自分が悪いと思う」は、内容的に重複する項目であることが考えられ、項目49がこの3つの意味内容を代表していると判断されたため、項目43と項目3を取り除いた。「否定的な他者破壊性」として集約した項目群には、項目29「他者に対して、「いなくなればいいのに」と思う」、項目32

「腹の立つ相手は、「不幸になればいい」と思う」、項目36「他者に対して、「同じ目に会えばいいのに」と思う」などの項目があり、文章表現に加えて、内容も似通っていて、項目32が他者への破壊性を最もよく表現していることが考えられたため、項目29と項目36は除外した。「肯定的な自己の外界へ向かう能動性」の項目群に関しては、項目21「色々な活動に対して、常にわくわくしている」が項目38「色々なことに、積極的に挑戦したい」や項目4「何事にも熱意がある」の2項目の内容を既に含んでいると判断されたため、項目21を取り除いた。

この時点で、「否定的な自己破壊性」の10項目、「否定的な他者破壊性」の9項目、「肯定的な自己の外界へ向かう能動性」の8項目、「肯定的な自己の内面へ向かう能動性」の9項目、合計36項目が残っていたが、本尺度は心理臨床の現場での使用を目的としていて、できるだけ項目数を抑えたいため、さらに項目の吟味を続けた。「否定的な自己破壊性」の項目群では、項目49「何か嫌な出来事があると、猛烈に自分を否定したくなる」と、項目14「「自分さえいなければ」と思う」、項目37「自分のことを「許せない」と思う」が内容的に重複していて、項目49の中に、項目14と項目37の内容が含まれていると考えられたため、この2項目を削除した。「否定的な他者破壊性」においては、項目16「他者の言動に対して、ちょっとしたことで、腹が立ってしょうがない」と項目12「他者のミスは、なかなか許せない」が、項目7「一度誰かを嫌いになると、ずっとその人が嫌いである」と項目5「他者に対して、「二度と関わりたくない」と思う」がそれぞれ類似の項目であると思われたため、“なかなか”や“一度”、“ずっと”などの程度や期間が個人によって異なる可能性のある項目12と項目7を除外した。「肯定的な自己の内面へ向かう能動性」の項目群では、項目24「自分の失敗に対しては、何がいけなかったのかを考えたい」と項目18「人を非難するよりも、まず自分の改善点をみつけていきたい」の

内容が似通っていて、項目24の方が項目18よりもより具体的な表現であると判断されたため、項目18を取り除いた。以上で、項目の精選は終了した。

残りの31項目について再度4因子解で因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行った結果をTable2に示す。回転前の4因子の累積寄与率は、44.11%とであった。

Table2 アグレッション尺度のバリマックス回転後の因子分析結果 (N=578)

	F1	F2	F3	F4
自責感(8項目) $\alpha=.814$				
49.1) 何か嫌な出来事があると、猛烈に自分を否定したくなる	.72	.00	.06	.17
27. よく考える前に、自分のせいだと思う	.68	-.08	.12	.02
19. 自分が関わることで、物事が悪い方向へ進むと思う	.62	-.11	-.05	.22
35. 何かにつけ落ち込む	.61	.01	.02	.13
39. 自分によくないから	.59	.17	-.01	.24
8. すぐに謝りたくなる	.58	-.01	.09	-.17
22. 自分の意見に自信がなく、他者に調子を含ませる	.52	-.17	.01	.03
10. 自分の努力は報われないと思う	.40	-.15	-.24	.18
積極性(8項目) $\alpha=.785$				
38. 色々なことに、積極的に挑戦したい	.00	.71	.18	-.06
13. 一度決めたことは、最後までやり通したい	-.07	.57	.24	.05
40. 困難と思える道でも、突き進んでいきたい	-.01	.56	.34	-.05
4. 何事にも熱意がある	-.12	.53	.18	-.07
48. 自分の気持ちは常に、自分の目標に向いている	-.17	.49	.20	-.02
31. 興味・関心の幅は広い	-.13	.47	.14	-.08
26. 平凡な毎日よりも、常に何か刺激が欲しい	.02	.47	.08	.05
34. 何事も、できないことは、悔しくてたまらない	.07	.46	.16	.09
内省力(8項目) $\alpha=.803$				
11. 厳しいことを言われても、自分と向き合いたい	-.06	.23	.70	-.01
30. 注意されたことは、積極的に直していきたい	.01	.17	.65	-.11
15. 注意・忠告・指摘されることをありがたいと思う	-.04	.12	.57	-.21
24. 自分の失敗に対しては、何がいけなかったのかを考えたい	.14	.26	.51	.00
18. 人を非難するよりも、まず自分の改善点をみつけていきたい	.14	.20	.47	-.15
9. 人からの評価を自分の糧(かて)にして、今後に生かしたい	.04	.21	.46	-.01
42. すべての出来事は、自分を成長させてくれると信じている	-.01	.38	.46	-.06
28. 傷ついても、前に進みたい	-.04	.38	.45	-.06
他責感(7項目) $\alpha=.737$				
46. 他者に対しての怒りは、なかなかおさまらない	.06	.11	-.16	.66
20. 気に入らない人には、冷たくしたい	.03	-.14	-.15	.61
32. 腹の立つ相手は、「不幸になればいい」と思う	.10	-.10	-.10	.59
41. 腹の立つことをされると、気がすまなくて言い返したい	-.04	.17	-.01	.50
7. 一度誰かを嫌いになると、ずっとその人が嫌いである	.07	.00	-.08	.48
5. 他者に対して、「二度と関わりたくない」と思う	.14	-.04	-.01	.46
23. 心の中で、他者を非難する	.17	-.04	.03	.40

注. 1) 項目番号は、50項目作成時のものである。

第1因子は、項目49「何か嫌な出来事があると、猛烈に自分を否定したくなる」、項目27「よく考える前に、自分のせいだと思う」、項目19「自分が関わることで、物事が悪い方向へ進むと思う」など、自己の非を責める因子と解釈された。よって、第1因子を「自責感」因子と命名した。第2因子は、項目38「色々なことに、積極的に挑戦したい」、項目40「困難と思える道でも、突き進んでいきたい」、項目4「何事にも熱意がある」

など、積極的に物事に取り組もうとしている因子と解釈された。よって、第2因子を「積極性」因子と命名した。第3因子は、項目30「注意されたことは、積極的に直していきたい」、項目11「厳しいことを言われても、自分と向き合いたい」、項目24「自分の失敗に対して、何がいけなかったのかを考えたい」など、深く自己をかえりみようとしている因子と解釈された。よって、第3因子を「内省力」因子と命名した。第4因子は、項目46「他者に対しての怒りはなかなかおさまらない」、項目32「腹の立つ相手は、「不幸になればいい」と思う」、項目20「気に入らない人には、冷たくしたい」など、他者の非を責める因子と解釈することができた。よって、第4因子を「他責感」因子と命名した。

そして、第3因子の「内省力」に含まれていた「主張性」に関する項目である、項目45「みんなが違う意見でも、自分の意見を言いたい」と項目17「他者の意見に左右されず、正しいと思うことは貫き通したい」は、本研究の削除基準に従うと、因子分析を進める中で、除外されていった。また、「積極性」に関わる項目48「自分の気持ちは常に、自分の目標に向いている」は、因子分析の際に、元々想定されていた「積極性」因子として集約された。

なお、モデル化の段階では、「肯定的な自己の内面へ向かう能動性」として分類されていた「何事も、できないことは、悔しくてたまらない」が、「積極性」因子としてまとまった。

## 2) 内的整合性の検討

尺度の内的整合性を意味する $\alpha$ 係数は、「自責感」因子で.814、「積極性」因子で.785、「内省力」因子で.803、「他責感」因子で.737と、いずれも高い値を示した。また、全体尺度で.765という値を示し、内的整合性という面で十分な信頼性を備えていることが確認された。

## 3) 併存的妥当性の検討

アグレッション尺度の全体尺度と安立（2001）

の攻撃性質問紙の全体尺度との間には、0.1%水準で有意な相関 ( $r = .597$ ) がみられた (Table3)。アグレッション尺度の下位尺度毎と攻撃性質問紙の全体尺度の間には、「内省力」因子以外の「自責感」因子、「積極性」因子、「他責感」因子において、0.1%水準で有意な正の相関がみられた (それぞれ、 $r = .460$ ,  $r = .207$ ,  $r = .551$ )。また、アグレッション尺度の各下位尺度と構成概念が近似の攻撃性質問紙の各下位尺度との間には、全て0.1%水準で有意な正の相関がみられた。

#### 4) 構成概念妥当性の検討 (1) 収束的妥当性

##### (1) 自己肯定意識尺度との相関

「積極性」因子と自己肯定意識尺度の「自己実現的態度」と「自己表明・対人的積極性」との間にも、0.1%水準で有意な正の相関がみられ ( $r = .647$ )、収束的妥当性が確認された (Table3)。そして、各々の「自己実現的態度」、「自己表明・対人的積極性」においても、0.1%水準で有意な正の相関がみられた (それぞれ、 $r = .645$ ,  $r = .488$ )。

##### (2) 自意識尺度との相関

「内省力」因子と自意識尺度の「私的自意識」との間には、0.1%水準で有意な正の相関がみられ ( $r = .478$ )、収束的妥当性が確認された (Table3)。

#### 5) 構成概念妥当性の検討 (2) 弁別的妥当性

日本版BAQの全体尺度との間には、低い正の相関 ( $r = .334$ ) を示した (Table3)。下位尺度毎には、「他責感」因子に0.1%水準で有意な正の相関がみられた ( $r = .614$ )。「自責感」因子では0.1%水準で有意な正の相関、「内省力」因子に0.1%水準で有意な負の相関がみられるものの、値が小さくほぼ無相関であった (それぞれ、 $r = .190$ ,  $r = -.139$ )。アグレッション尺度の各下位尺度と、攻撃性質問紙の各下位尺度との間には、「他責感」因子以外は、全体的に低い相関を示した。

以上の結果から、アグレッション尺度の各下位尺度では、妥当性検討のために用いられた尺度と別のパターンが示されていることから、それぞれに異なる意味や内容を含んでいることが示唆され

た。

Table3 アグレッション尺度と各尺度の相関

	自責感	積極性	内省力	他責感	全体尺度
攻撃性質問紙	.460***	.207***	.073	.551***	.597***
積極的行動	-.216***	.726***	.427***	-.013	.403***
自責感	.773***	-.079	.068	.243***	.484***
自己破壊行動	.380***	-.005	-.031	.350***	.327***
対象攻撃行動	.260***	-.053	-.208	.712***	.329***
猜疑心	.354***	-.081	-.071	.442***	.311***
自己肯定意識尺度	—	.647***	—	—	—
自己実現的態度	—	.645***	—	—	—
自己表明・対人的積極性	—	.488***	—	—	—
自意識尺度	—	—	.478***	—	—
日本版BAQ	.190***	.060***	-.139***	.614***	.334***
短気	.267***	.095*	-.035	.496***	.381***
敵意	.475***	-.082	-.152***	.513***	.363***
身体的攻撃	-.049	-.056	-.239***	.468***	.052
言語的攻撃	-.318***	.311***	.149*	.106*	.091*

\*\*\* $p < .001$  \* $p < .05$

#### 6) 男女差の検討

男女差の検討を行うために、アグレッション尺度の各下位尺度得点について対応のない $t$ 検定を行った (Table4)。その結果、「他責感」下位尺度 ( $t(565)=3.90$ ,  $p < .001$ ) について、女性よりも男性の方が有意に高い得点を示していた。「内省力」下位尺度 ( $t(568)=2.20$ ,  $p < .05$ ) について、男性よりも女性の方が有意に高い得点を示していた。「積極性」下位尺度 ( $t(563)=.104$ ,  $n.s.$ ) と「自責感」下位尺度 ( $t(565)=.763$ ,  $n.s.$ ) については男女の得点差は有意ではなかった。

Table4 男女別の平均値とSDおよび $t$ 検定の結果

	男性		女性		$t$ 値
	平均	SD	平均	SD	
積極性	3.48	.67	3.48	.67	.10
自責感	2.99	.73	3.04	.71	.76
他責感	2.97	.73	2.74	.67	3.90***
内省力	3.7	.61	3.81	.58	2.20*

\*\*\* $p < .001$  \* $p < .05$

## 考察

### 1) 因子構造について

アグレッション尺度の因子分析により得られた4因子は、本研究での定義に基づいて構造化された攻撃性モデルに、ほぼ準ずるものであった。この結果から、包括的かつ多角的な状態像としてのアグレッションの諸相を捉えることができた。しかし、因子分析結果を検討すると、モデル化の段階とは別の因子としてまとまりを構成した項目群が見られた。「肯定的な外界へ向かう能動性」



「積極性」因子)に分類された8項目のうち、1項目(「何事も、できないことは、悔しくてたまらない」)は、モデル化の時点では、「肯定的な外界へ向かう能動性」ではなく、「肯定的な自己の内面へ向かう能動性(「内省力」因子)」へ分類されることが想定されていた。本研究での「肯定的な自己の内面へ向かう能動性」とは、自己を深くふり返る力であり、因子としてまとまった8項目は、他者からの指摘に対して反発するのではなく、それを受け入れ改善していく意欲を示す内容である。しかし、「内省力」因子としてまとまらなかった上記の項目は、歯がゆさやあきらめ切れなさを表し、自己の内面へ向かう能動性というよりも、外界へ向けられる肯定的な力として解釈する方が適当と思われるため、このような結果に至ったと考えられる。

## 2) アグレッション尺度と攻撃性質問紙との関係について

アグレッション尺度の下位尺度と攻撃性質問紙の下位尺度の間には、理論的に近似とみなされる下位尺度同士はいずれも高い正の相関が得られた。「積極性」と攻撃性質問紙の「積極的行動」の間には、強い相関がみられ( $r = .726$ )、高い関連性が示唆された。攻撃性質問紙においては、「自分のやりたいことに向かって突き進んでゆく方である。」、「やりたいと思ったことは行動に移す方である。」、「どちらかといえば活動的な方である。」などの項目があり、アグレッション尺度では、「色々なことに、積極的に挑戦したい」、「一度決めたことは、最後までやり通したい」、「困難と思える道でも、突き進んでいきたい」などの項目が代表される。このように、攻撃性質問紙では、主に能動性の傾向に関して設問しているが、アグレッション尺度においては、欲求・願望についての項目が目立つものの、両者は“外界への適応を発動させる能動性”として共通するため、強く関連したと考えられる。

アグレッション尺度の「自責感」と攻撃性質問

紙の「自責感」には、高い正の相関がみられ( $r = .773$ )、「積極的行動」とは弱い負の相関( $r = -.216$ )、「自己破壊行動」とは弱い正の相関( $r = .380$ )、「対象攻撃行動」とは弱い正の相関( $r = .260$ )、「猜疑心」とは弱い正の相関( $r = .354$ )がみられた。このように、理論的に近似とみなされる因子以外にも、有意な相関が示されているものの、値は小さかった。攻撃性質問紙の「自責感」の次に高い相関を示した下位尺度は、「自己破壊行動」であった。このことは、前述したように自己破壊的行為の病理の背後には、抑うつ感や自責感が中核にあるという松木(1996)の見解と関連があると思われる。

「他責感」と攻撃性質問紙の「対象攻撃行動」には、高い正の相関がみられ( $r = .712$ )、「積極的行動」とは低い負の相関( $r = -.013$ )、「自責感」とは低い正の相関( $r = .243$ )、「自己破壊行動」とは低い正の相関( $r = .350$ )、「猜疑心」とは比較的強い正の相関( $r = .442$ )がみられた。攻撃性質問紙では、因子分析の際、「猜疑心」因子としてまとまることが想定されていた項目が、「対象攻撃行動」の因子として分かれたと安立(2001)は報告している。その考察では、「猜疑心」因子としてまとまった項目は、他者に対する迫害的な恐怖や警戒心、不信感が強い内容であったが、想定外に「対象攻撃行動」に吸収されたいくつかの項目は、迫害的な恐怖の次元にまでは達していなかったと述べている。すなわち、文章表現の仕方によっては、「対象攻撃行動」と「猜疑心」のどちらにも所属する可能性がある項目が存在し、この二つの構成概念は極めて類似していることが考えられる。よって、アグレッション尺度の「他責感」因子と、「猜疑心」も比較的高い相関を示したと考えられる。

「内省力」と攻撃性質問紙の「積極的行動」とは中程度の正の相関( $r = .427$ )、「対象攻撃行動」とは有意な正の相関を示したが、値は小さくほとんど相関がなかった( $r = .260$ )。Storr, A.

(1991) は、アグレッションは意図された他者からの危害や個人と個人の間で起こるものとは限らず、より広義の文脈で解釈されなければならないとしている。我々人間は、困難に立ち向かい、その困難を打ち砕き、乗り越え、熟達していくことを望んでいる。そこには、必然的に自らを振り返り、改めていく能力が求められる。このように考えると、「内省力」と、「積極的行動」に関連があったことは妥当と捉えることができる。しかしながら、比較的強い正の相関としながらも、その値は十分であるとは言い難い。「内省力」の項目を吟味すると、「人からの評価を自分の糧（かて）にして、今後に生かしたい」、「すべての出来事は、自分を成長させてくれると信じている」、「傷ついても、前に進みたい」など、他者から批判されたり、あるいはネガティブなライフイベントが起こった後に、積極性が発揮されると解釈することができる。結局のところ、自己の外界へ向かう「積極性」と前提条件があるかないかの差があるのみで、どちらの因子も似通った内容を含み、2つにわけ難い因子と捉えることもできる。このことは、前述したハルトマンの指摘（岡田、2001）にあるように、攻撃性や活動性に関しては、その2面性が「弁別しにくい」という主張にも通ずるところがあり、アグレッション（攻撃性）という概念の中に、「内省力」を盛り込むこと自体の困難さが示唆されている。また、辻（2004）の研究では、自己意識と自己内省を扱った尺度作成を試みているが、その尺度内の「自己内省」因子は、「自分自身を注意深く観察するほうである」、「自分の行動を客観的に観察するようにしている」、「自分の動きや気持ちをいつも分析している」、「自分は何ものなのかと考えたり、分析したりしている」の4項目から構成されている。本尺度での「内省力」と比較すると、その相違は大きく、「肯定的な自己の内面へ向かう能動性」という理論的定義の弱さや、因子名の適切さの問題も指摘できる。

以上のことより、攻撃性質問紙との比較から、

併存的妥当性の検証を認め難い結果になったといえる。

### 3) 自己肯定意識尺度との相関

自己肯定意識尺度と「積極性」因子との間に、比較的高い正の相関がみられた。自己肯定意識尺度の下位尺度である「自己実現的態度」の項目には、「自分の夢をかなえようと意欲に燃えている」、「情熱をもって何かに取り組んでいる」、「前向きの姿勢で物事に取り組んでいる」などがあり、「積極性」因子と特に正の相関が高かった。このことは、攻撃性質問紙の「積極的行動」と「積極性」因子に高い正の相関があったこととも関連しているが、自分の考え方ややり方、価値観に従い物事に挑戦していく姿勢が想定される項目群であるといえる。我々は、心理的・身体的に他の人々と比較や弁別をすることによって、自分が自分であるということを明確にする。“色”は他の“色”と比べることなしには存在せず、“人格”は他の“人格”と比べることなしに意味を持たず、“私”は“あなた”なしには機能しない（Storr, A., 1968）。そのように考えると、自分を同定し、確立していくための「自己実現的態度」は「積極性」と関連することは予測通りであった。

自己肯定意識尺度の「自己表明・対人的積極性」と、「積極性」因子の間にも比較的強い相関がみられた。「自己表明・対人的積極性」の下位尺度には、「相手に気を配りながらも自分の言いたいことを言うことができる」、「自分の納得のいくまで相手と話し合うようにしている」、「疑問だと感じたならそれらを堂々とと言える」など、自己主張に関わる項目が多くある。因子分析前の「積極性」因子に含まれることが予測されていた項目の中には、「他者の意見に左右されず、正しいと思うことは貫き通したい」や「みんなが違う意見でも、自分の意見を言いたい」など、「自己表明・対人的積極性」と近似の項目があった。アグレッションの肯定的側面には、自己主張が含まれているため（Storr, A., 1991）、「積極性」因子の中

には自己主張を想定する項目はなかったものの、このように関連していることが示されたと思われる。

#### 4) 自意識尺度との相関

自意識尺度と「内省力」因子との間には比較的強い正の相関がみられた。辻 (2004) によれば、内省には積極的・能動的なものと、自動的で受動的なものの二つに分かれる。能動的な内省は、自己自身に関連する課題の解決を目標として、現実的で論理的な思考にしたがって進められているといわれている。自動的・受動的に意思に浮かび上がってくる内省は、主に感覚や感情的過程への注意の集中であるとされる。本研究での「内省力」因子の項目である「注意されたことは積極的に直していきたい」や「自分の失敗に対しては、何がいけなかったのか考えたい」などに代表されるように、この因子は能動的な内省に当てはまるといえる。そして、理論的に近似とみなされる自意識尺度の下位尺度「私的自意識」と関連がみられたと考えられる。

#### 5) 日本版BAQとの相関

アグレッション尺度の全体尺度得点と「短気」に比較的強い正の相関、および日本版BAQの全体尺度得点、「敵意」の間に弱い正の相関、アグレッション尺度の「他責感」因子と、日本版BAQ全体得点、その下位尺度である「短気」、「敵意」、「身体的攻撃」と比較的強い正の相関がみられた。その他の下位尺度間では、有意ではあるが低い相関、あるいはほとんど相関がみられないという結果であった。「他責感」因子には、「他者に対しての怒りは、なかなかおさまらない」、「他者の言動に対して、ちょっとしたことで腹が立ってしょうがない」など、いわゆるアグレッションのネガティブな側面、一般的に用いられる攻撃性である他者への「否定的ないし反社会的行動 (秦・湯川, 2004)」を扱い、これまでの攻撃性の定義に最も近い概念であるため、比較的高い相関が示されたと考えられる。それに伴って、他の下位尺度では

ほとんど相関がみられないにも関わらず、アグレッションの全体尺度得点とも比較的高い相関が示されたとされる。

これらのことより、日本版BAQとの比較から、弁別的妥当性が認められたとは言い難い結果となった。

#### 6) 男女差について

男女差の検討では、「他責感」下位尺度において、0.1%水準で女性よりも男性の方が有意に高い値を示していた。また、「内省力」下位尺度において、5%水準で男性よりも女性の方が有意に高い値を示していた。このことから、内的なエネルギーが、男性では他者に対する攻撃心として、自己の外に向けられる傾向が高いのに対して、女性では自らを振り返る力として、自己の内に向けられる傾向が高い可能性が示唆された。

しかしながら、従来の攻撃性の男女差に関する研究結果によると、State-Trait Anger Scale (STAS) や State-Trait Anger Expression Inventory (STAXI) を使用した欧米での怒り研究では、おおよそ男性より女性の方が高い怒り得点を示したが (Spielberger, Jacob, Russell, & Crane, 1983 ; Ben-Zur & Zeidner, 1988), 日本人を対象にしたSTASの研究では (石渡・新田, 1987), 女性より男性の方の怒り得点が有意に高かった。

一方で、攻撃性のうちの敵意や身体的攻撃、言語的攻撃については、さまざまな結果が報告されていて、男女差の有無に関しては明確な結論が示されていない。したがって、本研究で得られた「他責感」下位尺度や「内省力」下位尺度での有意差は、一般的傾向であるのか、日本人大学生における特徴的なものなのかは今後の課題として残された。

#### 総合的考察

本研究では、攻撃性の概念整理を行い、これまで測定されてきた攻撃性を臨床心理学的立場から

捉え直し、アグレッション（広義の意味での攻撃性）を、積極性、内省力、他責感、自責感の4つに区分した。攻撃性に関する先行研究では、主に攻撃性にまつわるネガティブで、一方向性のみを捉えた研究が多く、得られた知見も攻撃性の限定された側面を測っていた。対象とする概念を明確に、かつより広く定義づけることで、新たな視点を提供することができ、この点で臨床心理学という枠組みの中での攻撃性研究について、本研究の果たした意義は大きいと考えられる。

そして、上記の区分に従ってアグレッション尺度を作成し、高い内的整合性、比較的高い収束的妥当性は確認されたが、経時的安定性、併存的妥当性、弁別的妥当性に関しては、満足いく結果を導き出すには至らなかった。

男女差については、2つの下位尺度に有意差が認められた。本研究では、男女別の因子分析も試みたが、4因子構造としてよりまとまりがよかったことから、男女を区別せずに最終的な因子構造を見出した。しかし、アグレッションの諸相を検討する上では、先行研究による男女差への見解はわかれているものの、性別という大きな変数を考慮した分析が今後は求められる。

信頼性に関しては、アグレッション尺度全体、各下位尺度ともに高い $\alpha$ 係数が確認され、内的整合性は検証されたが、経時的安定性に関しては、本研究で確認することができなかった。

また、妥当性に関しては、併存的妥当性確認のための攻撃性質問紙との関連では、予測されていたことではあるものの、アグレッション尺度の1つの因子に関しては、攻撃性質問紙全体尺度得点との相関がみられなかった。このことは、本尺度の独自性とも関わることであるが、併存的妥当性の検証として不足している部分である。妥当性を検討する手段としては、投影法や自由記述法、観察法、面接法を用いるなど、既存の質問紙を使用する以外にもさまざまな手法が考えられる。よって、今後は、本研究でアグレッションの定義に則っ

て、質問紙以外の測定方法でその妥当性を検討していくことも必要になる。また、攻撃性という概念に肯定的意味を積極的に取り入れたのは、精神分析の理論であるため、併存的妥当性を確認するためには、精神分析的妥当性検討が求められる。弁別的妥当性についても、「他責感」因子と日本版BAQの下位概念との間に比較的高い相関がみられた。攻撃性に関する既存の尺度とアグレッション尺度の他者へ向かう否定的側面は強く関連することが示されたが、今後はより弁別性を測り得る尺度との比較が求められる。

#### 謝辞

本研究は平成21年度修士論文に修正を加えたものです。修士論文の作成にあたり、指導教員として御指導いただいた吉田ゆり先生（現長崎大学教授）に心よりお礼申し上げます。

#### 文献

- 安立奈歩（2001）：攻撃性の諸相に関する研究 京都大学大学院教育学研究科紀要，47
- 安藤明人・曾我洋子・山崎勝之・鳥井哲志・嶋田洋徳・宇津木成介・大芦治・坂井明子（1999）：日本版Buss-Perry攻撃性質問紙（BAQ）の作成と妥当性，信頼性の検討，心理学研究，70，384-392
- 有馬道久訳（1990）：仲間関係と向社会的行動の発達 山本多喜司（編訳）社会性と人格の発達心理学（pp.131-189）北大路書房
- Averill, James R.(1982) : Anger and aggression : an essay on emotion, Springer-Verlag New York Inc.
- Baron, R. A., & Byrne, D.(2003) : Social psychology 10th edition, Allyn and Bacon.
- Ben-Zur, M., & Zeidner, M.(1988) : Sex differences in anxiety, curiosity, and anger : a cross-cultural study, *Sex Role*, 19, pp. 335-347.
- Berkowitz, L.(1993) : Aggression : its causes, consequences, and control. Temple University Press.
- Buss, A. H. & Durkee, A.(1957) : An inventory for assessing different kinds of hostility. *Journal of Consulting Psychology*, 21(4), pp. 343-349.
- Crick, N. R., & Dodge K. A.(1996) : Social information-processing mechanisms in reactive and proactive aggression, *Child Development*, 67, pp.993-1002.
- Freud, A.(1972) : Comments on aggression. *Int. J. Psychoanal.*, 53, pp. 163-171.

- 福島彰 (1993) : 加藤正明他編, 新版精神医学事典, 弘文堂
- Ghodsian-Carpey, J., & Baker, (1987) : Genetic and environmental influence on aggression in 4- to 7-year-old twins, *Aggressive Behavior*, 13, pp. 173-186.
- 林勝造・住田勝美・一谷彊・中田義朗・秦一士・津田浩一・西尾博・西川満 (1987) : PFスタディ解説 —1987年版一, 三京房
- 秦一士・湯川進太郎 (2004) : 攻撃の心理, 北大路書房
- 狭間秀文・田中雄三 (1984) : 躁うつ病と攻撃性, 中尾弘之編, 攻撃性の精神医学, 医学書院
- 平石賢二 (1990b) : 青年期における自己意識の発達に関する研究 (1) : 自己肯定性次元と自己安定性次元の検討, 名古屋大学教育学部紀要, 教育心理学科, 37, pp.217-234
- 星一郎 (2000) : アドラー博士のキレル子どもにしない法, サンマーク出版
- 今村洋子 (1994) : TATにみる非行犯罪の心理, 岡堂哲雄編, 精神病理の探求, 現代のエスプリ別冊, 至文堂
- 石渡博幸・新田 茂 (1987) : State-Trait Anger ScaleについてのPilot study IV-A, 日本教育心理学29総会発表論文集, 452-453
- 板谷順二 (1984) : 心理テストにおける攻撃性, 中野弘之編, 攻撃性の精神医学, 医学書院
- 鹿野達夫 (1979) : 攻撃性研究のための一序論, 原俊夫他編, 攻撃性, 岩崎学術出版社
- 加藤孝正訳 (1982) : HTP診断法, 新曜社
- 加藤正明・保崎秀夫・三浦四郎衛・大塚俊男・浅井晶弘 (2006) : 精神科ポケット辞典, 弘文堂
- 北村陽英 (1987) : 反抗と逸脱, 親離れの挫折, 馬場謙一他編, 青年期の深層 日本人の深層分析10. 有斐閣, pp.57-82
- 前田重治監訳 (1983) : 対象関係論とその臨床, 岩崎学術出版社
- 松木邦裕 (1996) : 対象関係論を学ぶ, クライン派精神分析入門, 岩崎学術出版社
- Mizen, R. & Morris, M. (2007) : On Aggression & Violence : An Analytic Perspective, New York: Palgrave Macmillan.
- 野上芳美 (1993) : 摂食障害とは何か, こころの科学, 52, pp.16-20
- 森 和子 (1983) : 質問紙による人格の二面性測定の試み, 心理学研究, 54 (3), 182-188
- 森山研介訳 (1983) : 喪とその躁うつ状態との関係, 小此木啓吾他監修, メラニーライン著作集3, 誠信書房
- 井村恒朗訳 (1970) : 防衛—神経精神病, フロイト著作集6, 人文書院
- 小此木啓吾 (1981) : 精神療法の基礎, 精神分析セミナー I, 岩崎学術出版社
- 小此木啓吾・柏瀬宏隆 (1981) : 対象関係論の展開, 誠信書房
- 小此木啓吾 (1993) : 自我, 精神医学事典, 弘文堂
- 岡田 督 (2001) : 攻撃性の心理 ナカニシヤ出版
- 大淵憲一 (1993) : 人を傷つける心:攻撃性の社会心理学 サイエンス社
- 李 敏子 (1997) : 心理療法における言葉と身体, ミネルヴァ書房
- Rushton, J.P., Fulker, D.W., Neale, M.C., Nias, D.K.B., & Eysenck, H. J.(1986) : Altruism and aggression : the heritability of individual difference, *Journal of Personality and Social Psychology*, 50, pp. 1192-1198.
- 佐野直哉 (1995) : 依存と自立の葛藤: 患者にとつての, 治療者にとつての, 精神分析研究, 39(1), 33-34
- Smith, T. W., McGonigle, M., Turner, C.W., Ford, M.H., & Slattery, M. L.(1991) : Cynical hostility in adult male twins, *Psychosomatic Medicine*, 53, 684-692.
- Storr, A.(1991) : Human Destructiveness, Grove Weidenfeld.
- Storr, A.(1968) : Human Aggression, Penguin Books.
- Spielberger, C.D., Jacobs, G., Russell, S., & Crane, R. S. (1983) : Assessment of anger : The state-trait anger scale. In J. N. Butcher & C.D. Spielberger (Eds), *Advances in personality addressment*. Vol. 2. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates. pp. 159-187.
- 外林大作訳 (1968) : 制限が治療である, 児童心理療法 I, 誠信書房
- 菅原健介 (1984) : 自意識尺度 (self-consciousness scale) 日本版作成の試み, 心理学研究, 55, pp.184-188
- 高橋哲郎訳 (1982) : ビオン入門, 岩崎学術出版社
- 高橋三郎・大野裕・染矢俊幸 (2002) : DSM-IV-TR 精神疾患の分類と診断の手引き, 医学書院
- 高橋義孝訳 (1970) : 人間のタイプ. 日本教文社
- Tellegen, A., Lykken, D.T., Bouchard, T.J., Wilcox, K.J., Segal, N.L., & Rich, S.(1988) Personality similarity in twins reared apart and together. *Journal of Personality and Social Psychology*, 54, 1031-1039.
- 鳥井哲志・山崎勝之 (2002) : 攻撃性の行動科学, 健康編, ナカニシヤ出版
- 坪内順子 (1984) : TATアナリシス, 垣内出版
- 辻平治郎 (2004) : 自己意識と自己内省: その心配との関係, 甲南女子大学研究紀要, 40, pp.9-18
- 辻岡美延・矢田部達郎・園原太郎 (1989) : YG性格検査 日本心理テスト研究所
- 占部優子訳 (1985) : 自我とエスにおける相互的影響, 小此木啓吾他監修, メラニーライン著作集4, 誠信書房
- 牛島定信訳 (1977) : 親と幼児の関係に関する理論, 情緒発達の精神分析理論, 岩崎学術出版社
- 八木俊夫 (1987) : YG性格検査, 日本心理技術研究所
- 山崎勝之・鳥井哲志 (2002) : 攻撃性の行動科学, 発達・教育編, ナカニシヤ出版



---

**A trial of scale creation measuring positive / negative side and directionality of aggression**  
: in the case of university students

NASHIRO Takuya

In this study, it was focused on the word “aggression” which includes positive side and is an emotion against the inside of human being, even though the aggression is usually used for negative image and against the others. Aggression in the broad sense was classified into quadrant; activeness, destructiveness, energy toward the outside and energy toward the inside.

Before inventory survey for university students was conducted to create a new scale, construct validity was verified with graduate-school teacher and students. In the main survey, questionnaires were distributed with other scales exploring concurrent validity, convergent validity, discriminant validity. As a result of factor analysis based on the data, the following four factors were found: aggressiveness, introspection, extrapunitive, intropanitive. Cronbach’s alpha was high, and it was confirmed that the internal consistency provided enough reliability.

About the concurrent validity, a high correlation coefficient was indicated among subscales those considered theoretically approximate, but introspection was independent. In terms of the convergent validity, it was confirmed a comparatively high correlation coefficient was yielded. As for the discriminant validity, although a low correlation coefficient was demonstrated as a whole, there was a high correlation with extrapunitive.

From the above, the results were not satisfactory in relation to reliability and validity of aggression scale in this study. In the future research, it is necessary to verify test-retest reliability, to compare with other scales improving concurrence and discriminance, or to confirm validity by using methods except questionnaires.

**KeyWords** : aggression, scale creation, reliability, validity